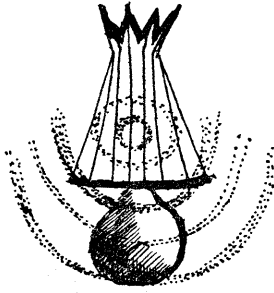


## 近代短歌に現われた子ども(二)



大塚  
雅彦

### (4) 伊藤左千夫

根岸派・アララギ派の鼻祖ともいうべき正岡子規やその弟子の長塚節は、共に独身で没したせい、子どもをうたった作品はあまりないようである。それに比して、同じく子規門の伊藤左千夫には子どもを素材にした歌がかなり多く、しかも優れたものが少なくない。これは一つには左千夫が妻との間に実に十三人の子女を生んだ子福者であった（四男九女のうち、長男・二男・七女・三男・四男の五名は夭折しているが）ということもあるが、左千夫の人生派ともいうべき歌風や、また、その豊かな人間性や、真情の溢れる人柄のせいもあったように思われる。左千夫研究家の永塚功日大教授は

「左千夫には本来熱情的な性格があり、それが一方では理性を抑えることのできないほどの激しい行為となつてあらわれることがある」「何事にも激しく自己を燃やすような性格」(同氏著『伊藤左千夫研究』昭15・5)と述べているが、このひたむきな性格は例えば彼の晩年の恋愛や相聞歌にも現われているし、また、愛する子ども達を詠ずる際にも、率直に現われてくるのである。岩波版『左千夫全集第一巻』に収められた彼の全短歌作品を仔細に見てゆくと、早くから子どもを詠じた歌がかなり出てくるが、初期のものは概ね傍観的な詠出や、属目的な点景のように子どもをとらえているものである。しかし、明治34年作の「牡丹」という連作や「麻疹」の長歌などは、病児を対象にした父性愛を溢れさせ、子煩悩な彼のプロフィールを早くものぞかせている。また、友人たちが子どもを死なしめた際や子どもが誕生した際などに贈った歌が少なくなく、律気で友情に篤く、子ども好きな左千夫の性格を思わせる。街なかの歩みや散策の際でも、川舟で母親と共に父親の帰りを待つ水上生活者の子ども

の心情を思いやったり、渡舟の渡守が嘔の童児があつたことに鋭く眼をつけて詠じたりして、ヒューマニティの溢れる作品をのこしている。明治39年の「蕾の玉」一連は左千夫に最も愛されたという五女由伎をモデルにしたものと思われるが、詞書に「世の中に幼きものをいつくしむ許り楽しく尊とおぼゆるはなし」と述べているのはいかにも左千夫らしい。由伎さん自身「私が物心ついたころ、父は私を大へん可愛いがってくれました。子煩悩でやさしい父でした。……父と交際する人はみな、その人間的魅力にひかれたのでしょいか私の家に入りましたいた豆腐屋まで父を慕っていました」と述べた(春木千枝子著『伊藤左千夫』昭48・9)由である。まことに愛の歌人というべきであろう。

① かにかくに土にも置かずはぐくめば吾が命さへそこにこもれり

② よき日には庭にゆさぶり雨の日は家とよもして児等が遊ぶも

③ 七人の児等が幸くば父母はうもれ果つとも悔なくお

もほゆ

④暫くを三間打抜きて七人の児等が遊ぶに家湧きかへる

明治41年作で、「アララギ」一卷一号（同年10・13）に載った。明治四十年代の彼の作品になると、こういう傑作があらわれてくる。①の「かにかくに」は「あれこれ」とにかくも」の意味。この歌については左千夫が信州の篠原志都児に次のように書き送っていることが参考になる。「多くの子を持ち辛き世に立つと云ふことは愛情の強いだけそれだけ悲惨な感が強い。我命さへそこにもれり（傍点左千夫）と絶叫するに至るのである。読者がさういふ意味で読んでくれたもの一人もないやうだ。君すらも褒めてはくれても此一点を見てくれぬが残念である」。②や④はいかにも子どもの生感をよくとらえていて、幼き者の動きが眼に見えるようである。天候のよい日は庭で暴れ廻り、雨の日は家の中を割れるばかりにドタバタと走り廻って遊ぶ子ども——われわれにも皆幼時のこのような思い出がある。「三間打ち抜きて」な

どは、いかにも子煩悩で、子ども本位の家庭生活をした左千夫が偲ばれ、子どもの動きに眼を細めている彼の姿が髣髴とする。ちなみに、「左千夫は決して子ども達を叱りなかつたという。妻のどくが子どもを叱ると、左千夫は「子どもはのびのびと育てることだ」と言ってきかせたという」（荒川法勝著『伊藤左千夫の生涯』（昭48・7）。女の子たちが男の子のように取っ組み合いをしても、左千夫は中に入って止めもせず、叱りもしなかつたと伝えられるが、ここにも大らかな彼の性格がしのばれる。③なども、子をもつ親の真情をうたつてみごとである。「幸くば」は「幸いならば」の意味。なお、この一連には「よきも着ずうまきも食はず然れども児等と楽しみ心足らへり」という歌もある。これも橘曙覧の「独楽吟」に通う趣きがあると思うがどうであらうか。また、この一連などは万葉集の山上憶良の発想を思わせるものがあるのも諸家の指摘するところ（谷聲著『現代短歌』昭26・12、その他）である。

⑤おくつきの幼なみ魂を慰めんよすがと植うるけいと

## うの花

⑥数へ年の三つにありしを飯の席身を片よせて姉にゆづりき

⑦古への聖々<sup>ひじょうじやう</sup>のことはあれど死といふことは思ひ堪へずも

明治四十二年作で、「アララギ」二卷三号（同年11・1）に載った。「吾兄のおくつき」の題がある一連八首よりの抄出であるが、同年五月二十四日庭前の池に溺れて死んだ七女の七枝を悼んだ歌である。「ホトトギス」同年九月号に発表した「奈々子」はこの事件を題材にした小説であり、また後述の如く一周忌には「浮藻」七首を詠んでいる。一般に愛児の死を歎いた歌には悲痛なものが多く、とりわけ子どもを溺愛した左千夫には堪えがたかったに違いない。小説「奈々子」の中で「真に愛するものを持たぬ人や、真に愛するものを死なしたことの無い人に、どうして今の自分の悲痛がわかるものか。哲学も宗教も今の自分に何の慰藉をも与へ得ないのは、たうていそれが第三者の言であるからであるまいか。自分

はもう泣くよりほかない。…わが子を見守って泣くよりほかは術はない」と述べているが、慟哭という語は、まさにこのようなことを云うのであろう。⑤の「おくつき」は奥津城、つまり墓である。⑥は、おしやまな亡き幼児の食事の席での動作を具体的に描いているのが哀れを誘う。⑦は、「昔の聖人たちのこういう際の例などの話は色々聞いてはいるが、どうにも死というものは堪えがたい思ひのするものだ」という意味であろうか。仏教に擬った左千夫らしい作だ。

⑧み仏と変りし御名をささげ持ち吾がにひむろにうつしまつりぬ

⑨禍の池はうづめて無しと云へど浮藻のみだれ目を去らずあり

⑩人くれば人と笑ひてありといへど亡き児偲ぶに我がむね痛し

⑪汝をなげくもの外になしいきの限り汝を恋ひまもる此の父と母と

明治四十三年作で「アララギ」三卷五号（同年6・

1)に載った「浮藻」という題の一連七首からの抄出であり、前述の如く七枝一周忌の作である。⑧の「にひむろ」は新築の家や室が語義だが、この場合は、茶道に凝っていた左千夫がこの一年の間に茶室を新たに作ったのであり、その唯真閣に亡児の位牌を移したことを示す歌である。⑨は亡児の死後、そのいまいましい池は埋めてしまったが、溺死の折の浮藻のみだれのさまが今も目を去らない、という歎き、⑩⑪は親の心情を吐露したもので、「いきの限り」という一語など強烈である。左千夫門下の土屋文明氏は、前出の「吾児がおくつき」一連については「事件そのものから来る重庄のためか、左千夫自らの言つた新しい境地にまだ入り兼ねた趣のやうに思はれる。寧ろ左千夫の素朴純情を知るべき一連」と言い、この「浮藻」の方は「時日が経つて居るので、感動が理に支へられたやうなところもあるが、その一面事件からの脱却があり、いくらかゆとりがみえて……」と述べている(同氏著『伊藤左千夫』昭37・7)。しかし辻村直は「前年の〈吾児がおくつき〉に比べると、この一

連(大塚註「浮藻」のこと)の方が遙かに事件が眼立ち過ぎる傾はあるが、そこが反って如実であつて人の心を引くのである」と、やや違った鑑賞をしている(斎藤茂吉・土屋文明編『左千夫歌集合評』(昭19・7)。なお、明治四十五年作の「招魂歌」一連に於ても左千夫は、生まれて僅か十三日で死なせた三男究一郎を悼む十二首を作っているが、多くの子を夭折させた彼の悼児挽歌は、いずれも心うつものがある。

⑫黒髪のうなゐふたりが丹のおものまろき揃へて笑み  
かたまけぬ

⑬みぎひだり背に寄りつくを負ひ並めて笑ひあふるる  
真昼の家に

⑭いとけなくめぐしき児等が丹のをもの輝くいまを貧  
しといはめや

大正二年作で、「婦人評論」二巻四号(同年2・15)に載った一連より抄出。「わが幸」の題と、「年明けてふみ児は四つ鈴子は五つ」の副題がある。八女鈴子と九女文ふみの両女をうたったもので、ここにも子どもをひたすら

愛した左千夫の父性愛がにじみ出ている。⑫の「うなる」は髻髪で、子どもの髪のをうなじで束ねたもの、あるいは、子どもの髪のうなじのあたりで切りさげておくもので、転じて「幼い子ども」を指す。「丹のおも」はあかい顔で、りんごのホップというところか……。この歌などは土屋文明氏は、通俗的で低調な歌の方であるように鑑賞しているが（前掲『左千夫歌集合評』）、私などは、やはり忘れがたい作品である。⑭の「いとけなく」は「あどけなく、がんぜなく」の意、「めぐしき」は「可愛いらしき」「いとおしき」の古語。この一連についてはやはり左千夫門の斎藤茂吉は「以上五首は、秀歌を目ざすやうな意図がなく、楽しんで歌ひ上げて居る点に注意すべきであつて」と述べている（前掲書『合評』が、それだけに左千夫の人生観や倫理観が自然流露的にあらわれているのではあるまいか。

左千夫は私の最も好きな歌人の一人だけに思わず力が入って、多くの筆を費してしまったが、彼の子ども詠は近代短歌史にのこる佳品と私は信じているものである。

## (5) 佐佐木信綱

「竹柏会」を結び「心の花」を創刊した信綱は、多くのすぐれた門弟歌人を育て、また国文学者、歌学者としても知られたが、その歌風は温和、重厚、典雅で、おおらかであり、「広く深くおのがじし」ということを標榜した通りである。生涯にわたって十二冊の歌集をのこした。

① 破れたる傘からかささして子等ぞゆく古き駅の雨のゆふぐ  
れ

② 順礼の親子のすがた山に入りて青葉がくれの補陀落  
の 声

③ 幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶ  
きぬ

④ 年とへば手をひろげても見する哉かなうつくしき子よ汝  
が家いづこ

第一歌集『思草』おもいぐさ（明治36年刊）より抄いた。清新な

歌風と浪漫的な心情が盛られた歌集で、明治三十年代に旧派和歌に対して新派和歌の旗頭として登場した人のものだけに、こんにち読んでもみずみずしいが、子どもを素材にしたものも、なかなかユニークである。①は古い歌(う、ま、やと読ませる)の雨の景で、破れ傘をさしてゆく子ども達を提示した発想は、当時としてはフレッシュなものであったと思われる。②は順礼の親子をとらえている。こんにちではあまり見かけなくなったが、私の幼時には、よく親に従って歩いて行く子どもの白衣の順(巡)礼姿を見かけたものだ。諸方の聖地、霊場等を参拝して廻るのである。私はもの悲しいような気持で、いつまでも子どもの順礼姿を見送ったのを思い出す。「補陀落」<sup>ふだらく</sup>とは観音が現われたという霊場で、もともと印度の南端にあるといわれたが、中国や我国では観音の霊場を指すのに用いられるようになった。熊野地方の補陀落渡海の説話など是有名である。なお『思草』は「六部一人しづの男一人馬の上ゆ見ゆるあぜ道ただ春の風」の如く六部をうたった作品もある。六部とは書写した法華経を一部ず

つ日本六十六ヶ国の霊場に納めるために遍歴する行脚僧<sup>あんぎや</sup>で、これも最近は見かけなくなった。③「どち」とは同類をいう接尾語で、同士・仲間の意味。子ども同士が語り合っている添景に葡萄の樹があり、そこに月がかたぶいたという状態で、当時としてはいかにも新鮮な歌材、みずみずしい詠風であった。④は幼な児に「幾つ?」と問うと掌をひろげて指で答える、更に「お家どこ?」と問いかける、そんな幼児との問答をしている場面が眼に見えるようだ。「うつくしき子」とあるから、女の子の感じである。

⑤女の童<sup>め</sup>柄香<sup>えかう</sup>炉<sup>ろ</sup>さざげまうのぼる長谷<sup>はせ</sup>の御寺<sup>み</sup>の山ざくら花

⑥よく踊る旅芸人<sup>ち</sup>が小さき子の行末<sup>ゆくすゑ</sup>かなし山の湯の秋第二歌集『新月』(大正元年刊)より抄出。『新月』には自由奔放の詠風が加わり、また、題材では生活に即したものがうたわれ、用語や調べも奔放になった面がある。⑤は牡丹で名高い長谷寺がうたわれている。「柄香炉」というのは把手のついた香炉である。童女がそれを

捧げて詣でのぼってゆく、背景としては山桜花が咲き盛っているというので、絵のように美しい光景である。いかにも古典や有職故実(きやくきぎ)に造詣深い作者の歌らしい典雅にして優美な作である。⑥は感傷をふくんだ抒情的な歌である。私はこの作に川端康成の「伊豆の踊り子」を思い出すのだが、どうであろうか。旅芸人の小さい娘への哀憐の情が溢れているのである。

⑦四つといふ子が目の澄みの深きかも廢類の風景うつる事なかれ

⑧講堂にあふるる幼な生徒らをみまもるわが目涙にじみく

信綱の第十歌集『山と水』(昭和26年刊)より抄出。この書は、多くの信綱歌集の中で戦後の作品を代表するものである。妻を悼む挽歌をふくみ、旅行詠も多いが、また、知性的なものや思想的内容、人生観などを詠みこんだ歌も少なくない。⑦などはそれで、四歳の幼児の澄んだ眼に戦後の頽廢した世相風景など映るなど、思念的なものをうち出している。⑧は「小学校にて」という題

がある中の一首で、伊勢の石薬師が信綱の郷里であるが、旧宅の跡は小学校の敷地の一部となったようで、その小学校で講演でもした折の作品であろうか？ 幼い生徒らを見守り老いの涙をにじませている作者の姿が目に見えるような歌である。(お茶の水女子大学)

〈13ページより続く〉

本稿を着想した筆者の脳裡には、実は他ならぬ「人間科学」の論議ということがあったのだが、いまもしサイエンスが理学であつたとしたら、これもさしづめ「人間理学」の論ということになり、さながら「社会理学」や「行動理学」などということも同じで、ことがらははや単に語感の問題だけに止まらなくなるのではないかという問題である。前時代の「理学」はあながちその方正な字面、凜然たる語言ということを離れても、先進の演繹的精神科学との因縁から、何か概念上の余計な桎梏を帯びていたのかも知れないという感が残るのである。新興の「科学」は、名義としてはたとえお粗末な選汰だったとはいへ、サイエンスをそうした旧理学の桎梏から解放して、生物や人間対象の探究へと門戸を開こうというスローガンを意味していたのだから。この点の検討については、科学哲学を専門とする方々の高説をまつほかない。サイエンスを科学というその科の字とは何か。われわれはもはやその問題を御破算にして、科学はただの「カガク」でよいのだという時点まできている。ただそのカガクが、旧来の理学の軌範からどこまでみずからを解放してよいのか、ということが、今後の具体的問題となるかと思われる。いまはここまでのところで締めくくって置きたい。